九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

マンガを素材とする異文化理解教育の方法開発

因，京子
九州大学留学生センター助教授

日下，みどり
九州大学比較社会文化研究院教授

松村，瑞子
九州大学言語文化研究院教授

https://hdl.handle.net/2324/16817

出版情報：日下翠教授中国文学・漫画学著作集成，2005-03
バージョン：
権利関係：

マンガで学ぶ日本語：日本語教育でのストーリー・マンガ利用の可能性

因　　京　子

1．はじめに

「苦しくったって、悲しくったって、コートの中では平気なの。」懐かしい文句が福岡市内の某ショッピング・センターの冬のポスターにキャッチ・コピーとして現れた。寒い冬を素敵なオーバーコートで暖かく、というわけだ。これを見た留学生が「日本語でも『中では』が『着れば』の意味になるんですね。英語と似てる。」と言う。私は慌てて、「いえいえ、ここではそうだけど、このコートはもともとバレーボールのコートなんですよ。『アタック・ナンバーワン』っていう人気マンガが昔あって・・・」と、とうとう主題歌を声張り上げて歌うことになってしまった。

「あしたはどっちだ。」2000 年 11 月、次の日に内閣不信任案が提出されるかどうか注目を集めていた、その日の毎日新聞夕刊の見出しには『あしたのジョー』の有名文句が使われた。

このように、日常的なメッセージの中にマンガ作品への言及が現れることが珍しくなくなっている。マンガやアニメはもはや子供や若者だけのものではなく、かつて芝居の名台詞がそうであったように、社会の多数の人々に共有される文化の一部となりつつある。

マンガは、日本語教育の素材としても大きな可能性を秘めている。基礎項目を一通り学んだ後の中・上級のレベルでは、新聞や雑誌の記事、短編小説などを教材とすることが多いが、それらと比べてマンガのテクストは、主に話し言葉で構成されるという特徴を持つ。実用的な関心から日本語を学びたい人々が増えている昨今、話し言葉が、それが発せられる場面と共に提示されるマンガは、生の日本語を知りたい学習者たちにとって大変魅力的である。しかし、マンガの価値はそれだけに留まるものではない。子供向けの作品が殆どである諸外国とは違って、日本には、大人の関心をも惹きつける深みのある内容を持つマンガ作品がたくさんある。学習教材としてマンガを用いる最大の利点はここにある。すぐれた作品は、面白さと共に、内容や言語表現をじっくり分析するに足る深さと広がりを備えており、適切な作品を選んで使えば、他の手段ではなかなか具体的に示しにくい状況の中での言語の様相を体系的に提示したり、考察と論理構築を必要とする高度な発信活動を引き出したりすることができるのである。

しかし、マンガを効果的に使うには、その特徴を十分に理解しその可能性と制約とを把握した上で、適切な目標を設定し、適当な作品を選択し、具体的な活動を考案しなければならない。では、マンガの教材化はどのように行えばよいだろうか。

2．マンガ媒体の特徴と教材化

マンガは、⑴言語と画像からなる複合的な媒体であり、⑵文字と静止画からなる静止した表現を用いる媒体であるという特徴を持つ。これらの特徴は、教材として利用する上でどのような利点と問題点とを有するだろうか。

⑴複合的な媒体である。

中級以上の学習では、言語素材に受動的に接するだけではなく、内容について推論した

り批判したりしながら理解し、自らも発信する創造的活動を行うことが重要であると指摘されている（注１）。そのような活動に結びつくには、読み応えのある素材でなければならないが、かといって読み進むのがあまり難しいと学習者は挫けてしまう。深みのある内容と意欲を殺がないわかりやすさを兼ね備えた素材を探すのはなかなか難しい。

日本語教育でよく用いられる素材を媒体によって分類すると、次のように大別される。

(a)文字によるもの：新聞、雑誌、小説、論文など、

(b)音声によるもの：ラジオ・ニュース、公共アナウンスなど、

(c)音声と動画によるもの：テレビドラマ・ドキュメンタリー・映画など。

マンガは上のどれとも異なるが、媒体が複合的であるという点で(c)と類似している。複合媒体の素材は、言語の難度が学習者の処理能力を多少上回るものであっても、画像から情報が得られるため、内容の展開についていくことが比較的容易である。中級以上の合同学習ではしばしば学習者の運用力にばらつきがあり、意見の交換や議論をしてもらおうと思っても、その前提となる材料を皆が咀嚼して同じ土俵の上に乗るまでに時間を取られることがある。複合的媒体の素材を用いると、この段階をかなり円滑に行うことができる。

しかし一方、言語処理能力だけに頼らず理解ができるだけに、言語表現に十分な注意が払われなくなる恐れもある。学習目標を明確にし具体的な課題を提供して言語観察を行うように促さなければ、「ああ、面白かった」で終わってしまうことになりかねない。充実した課題を準備することが教材としての有効利用の鍵を握っていると言えるだろう。

⑵文字と静止画による静止した表現である。

ドラマは音声と動画、マンガは文字と静止画によって情報を伝える。ドラマには音声という有力な手がかりがある反面、休みなく情報を処理していかなければならず後戻りができない。マンガには音声がないが、文字も画も静止しているため自分の速度で処理を行うことができ後戻りも繰り返しもできる。辞書など補助手段の利用も可能である。これは、言語の構造について徹底した分析的処理を行うには大変便利であり、成人学習者の多くが取り組みやすいと意欲を感じる特徴である（注２）。

しかし、マンガの表現には独特の規則があり、小説のような文字だけのテクストよりも却って学習者を戸惑わせるかもしれないことを知っておかなければならない。

難しさの一つは、マンガの絵と文字の象徴性である。マンガの絵は独特の誇張された表現を含む。例えば、大粒の汗（緊張）、点になった目（驚愕）、目の中の炎（情念の高まり）、顔に表れる複数の縦線（落胆・不安）などである。これらは、逆に言語のほうに新たな表現を生み出すほど日本人読者にはなじみ深いが（注３）、学習者の誰もが直感的に理解できるわけではない。また、文字の字体や発話を囲む枠にも、同時に進行する複数の談話の流れを区別したり、感情的色彩を示したり、思考と発話を区別したりなど、いろいろな機能がある。これも、指摘されなければ気づかない学習者が多い。

コマの進み方といった基本的なことも、学習者を戸惑わせることがある。右から左へ、上から下へ進行するのが原則であるが、日本のマンガでは、同じ大きさのコマが規則的に並んだり同じ割付のページが連続したりすることはむしろ少なく、ページ毎に大きな変化がある。他のコマ全ての背景と考えるべき大判コマ、左右を同時進行と解釈すべき二分割された頁など、原則だけでは読み進めないものが多く、意識的な導入が必要である。

また、マンガ独特の表記にも注意が必要である。音声の変化をかなり忠実に反映するもの（例：ったく、しりたかない）、独特の態度を暗示するもの（例：そーゆー、おねーチャン）などの非標準的表記について、そのニュアンスを推測することはもちろん、標準的表記を推測することも、母語話者が思う以上に難しい。しかし逆に、うまく利用すれば口調の意味を解釈するためのよい材料となる。

マンガを教材として利用するには、学習者が読み進む上で遭遇するかもしれない技術的困難をよく認識し、それに対する適切な手助けを提供する必要がある。

3.マンガにおける言語の提示と教材化

マンガにおける言語の提示は、発話される場面や発話者の表情など視覚情報と共に示されるという点で小説とは異なり、心理と発話など複数の流れが言語として重層的に提示されるという点では映画とも異なる。マンガでは、状況との関連によって諸要素がどう選択されるか、直接的に吐露しにくい内容がどう表現されるかなど、表面形式と実際の意味との関連をありありと観察することができる。

日本語の会話では、文末ではレベル、くだけた発話であればジェンダー表示についても、選択が必要である。また、述語形式に尊敬語や謙譲語を選択すべき場合もある。これらの選択によって、同じ内容の発話でも談話の中での効果には大きな違いが生じる。学習者はしばしば「日本語は敬語が難しい」と訴えるが、この発言によって言おうとしているのは敬語の形が覚えにくいというようなことではなく、敬語を含む広い範囲の文体的要素の意味の解釈及びその使い分けが難解だということなのである（注４）。丁寧体や尊敬語などが、多くの教科書に書かれているように、「目上の人には尊敬語」、「改まった場面では丁寧体」などと固定的な規則で運用されるのならそれほど大きな問題ではないだろうが、実情はそれほど単純ではない。同じ関係であっても、一定の基本的範囲を守りながら、どの状況要因を重視するか、どのような発話意図を持つかによって、様々な使い分けや見かけ上の逸脱が生ずる（注５）。実際の発話の背後にある複合的要因を理解するには、具体的な例を通して状況と形の関わりを観察するのが早道である。マンガ作品の中には、教科書では説明しにくいこのような様相を具体的に提示することのできる例があり、教材として利用できる。以下に、具体例をいくつか示したい。

(1)文体の使われ方を観察する

まず、丁寧体と普通体の使い分けの様相について観察を行う材料となる例をあげる。日本語の場合、使用すべきレベルは発話参加者の身分や立場によって決まるが、常に固定しているわけではなく、発話者の会話上の配慮や態度によってある程度の選択や変異が認められる。例１は中年の女性患者と若い担当医との会話である（注６）。会話部分を抜き出してみよう。

例１　患者「癌――なんですかねェ」

医師「ま、それも含めて今検査をしているんですよ。はっきりしたことはやはり手術をしてみないと―」

患者「不思議なもので、自分の病気についてはこわくもなんともないんだけど、た

だこどものことだけがかわいそうでねェ」

医師「そーんな暗いことばっかり言ってたら、かわいい息子さんが心配するよ」

図1

社会人同士の会話らしく、基本的には「癌なんですかねえ」「今検査しているんですよ」とお互いに丁寧体を用いている。医師と患者としてのやりとりをした次の段階で、患者は自分の真情を吐露する。そのときには「自分の病気についてはこわくもなんともないんだけど、こどものことだけがかわいそうでねェ」と、普通体を使用した。「ないんですけど」「かわいそうでしてね」のように丁寧体を用いても違和感はないが、普通体の方がより率直に真情が伝わるのは明らかである。これに応ずるに医師は、「そんな暗いことばっかり言ってたら、かわいい息子さんが心配するよ。」と、相手と同じように普通体を使用した。ここでの両者の普通体使用は、双方とも社会的仮面を一枚はずして率直な気持を述べていることを表すのに大きく貢献している。丁寧体のままであったなら、患者と担当医という関係性の中に留まるであろうが、普通体への移行によって通常の枠から一歩踏み出して人間同士として歩みよっているのである。

しかし、親密さを増すという目的があればいつでも誰でも普通体への移行が可能なのかと言えば、そうではない。「ざっくばらんに話す」と「無作法に話す」との間には大きな違いがある。例1では、どの程度親しくなるかの主導権を握っているのは患者の方であり、主導権を持つ側がまず自己開示をして接近への意図を表示したことが重要である。これによって医師は親戚の娘のような一見ぞんざいな口を利くことが許され、また、期待されて

もいる。ここで医師が「そんな暗いことをおっしゃってはいけませんよ。」などと優等生的な応じ方をしたら、患者は肩透かしを食ったように感じるかもしれない。この例は、「主導権を握っているほうが先に親密さへの意図を示すことができ、相手はそれに応じた方が丁寧な態度と受け取られる」（注７）という、日本語会話におけるレベル交替の様相とその典型的な動機の一つを示している。

レベルの意味するところの解釈はその使い分け以上に難しく（注８）、学習者の中にはかなり誤解が見られる。事務室で「～さん、申請の紙はある？」などと普通体で話しかけられたのに対して「見下された！」「こども扱いされた！」と怒っていたり、目上の者が用いる丁寧な表現を「卑屈な態度」となど評したり（注９）、「普通体イコール敬意の欠如、丁寧体イコール尊敬」と信じ込んでいる場合が少なくない。例を示しそこに働いているメカニズムを解説すれば、文体的要素の使用が機械的規則に従っているという誤解を解き、それらが話者の気持を示すために柔軟に使われる日本語談話の実態に対する感受性を高めることができるであろう。

⑵発話行為の実現形の多様性を観察する

「頼む」「断る」「ほめる」「なぐさめる」・・など、いろいろな発話行為を行うのにどんな内容をどんな言い方で言うのが適切であるかは、状況との関連を考えずには判断できない。単純に形式の丁寧度が高ければ恭しい気持ちが表れるというものではなく、丁寧度の高い表現がかえって高慢な感じを表したり、一見乱暴な叱責に見える表現が実は暖かい励ましであったりなど、表面的意味と本当の意味は必ずしも一致しない。日本語教育では、初級の段階では話す教育に重点が置かれるが、中級以上の会話能力の向上には全般的にそれほど注意が払われてこなかった。訓練の項目として取り上げられるのは「待遇」「尊敬語」などであり、「失礼がないように」ということが主な関心を集めてきたと言えよう。しかし、人が言葉を話すとき、必ずしも恭しい態度を表すだけで事足りるわけではない。決定的な決裂に至らない範囲で文句を言ったり、相手に決まりの悪い思いをさせないように助けの手を差し伸べたり、微妙な感情を表したいと思うのは自然なことであるが、そうした技術を身につけたいと願う学習者の参考になるような教材はまだまだ少ない。

次にあげるのは、同じ発話行為でも多様性があることを観察できる例である。①～③は全て、予定の時刻に遅れた医師を看護師が急きたてているものである（注 10)。

例２

① 医師　「ひゃ～っ、すみませーん」
　看護師「あっ、もーっ、おそいっ　おそいっ　おそいですよっ」
　医師　「ごめーん」
　看護師「患者さん、もうずーっと待ってますよォ」

② 看護師「木村先生、おくつろぎのところ申しわけありませんが、今すぐとっとと内視鏡室に来てください。先生の当番でしょ」
　医師「えっ、あれっ、今日僕だった？」
　看護師「はい。『僕』です」
　医師「すぐ行きまーす

図 2

③　医師「お待たせしてすみませーん」

看護師「杉坂先生っ。時間はお守りにならないと困りますっ。あとがつかえておりますからっ。」

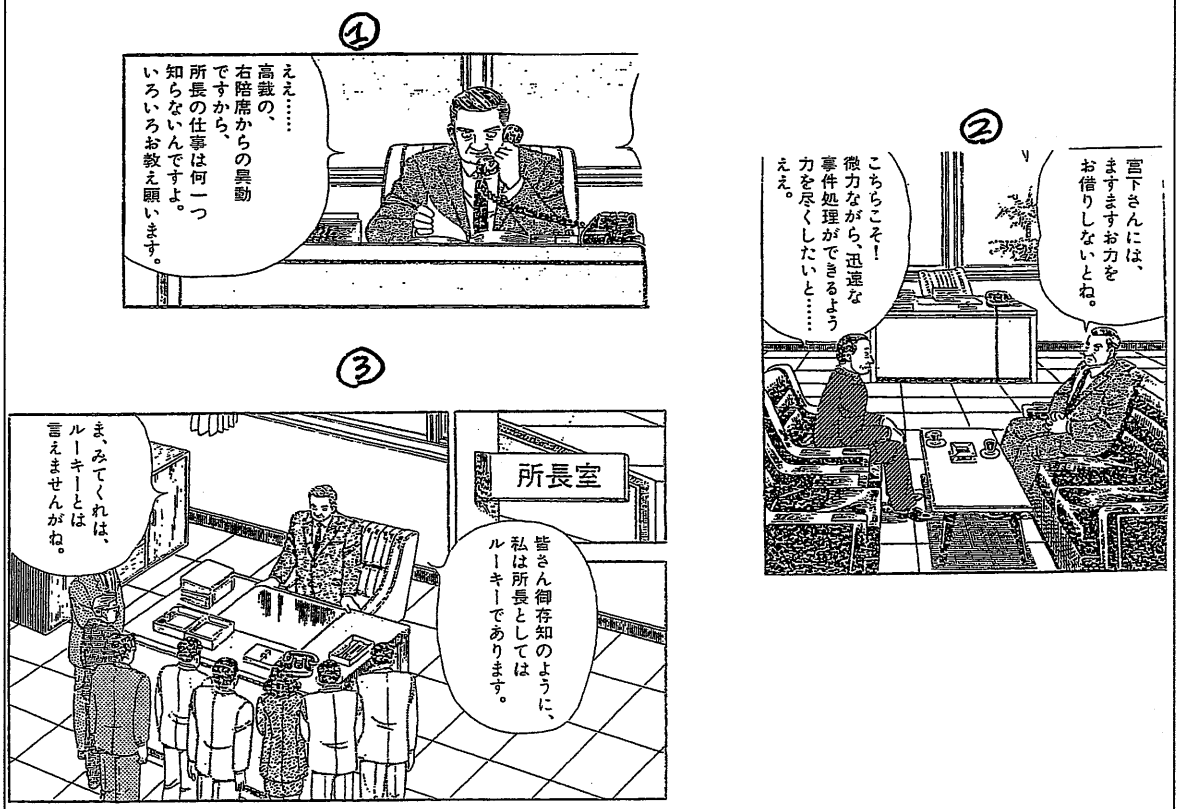
医師「いやーっ、廊下で患者さんの家族につかまっちゃって〜っ」

①は、直截であるが底意がないため、医師も「ごめーん」とざっくばらんにあやまっている。②は、「とっとと」などあたかも悪意があるかのような表現を故意に用いた上、「僕です」と医師の返事をオウム返しでまねるなど、「冗談」というストラテジーを用いて相手へのあたりを柔らかくしている。③は、「時間はお守りにならないと」と丁寧度は高いが、尊敬語を使うことによって、相手が尊敬語を使われるほどの立場にありながら行動にはその自覚が足りないということを際立たせ、責めている。このような例を使えば、認知的意味の上では類似した発話でも言葉の選択によって様々に異なる「ニュアンス」が生み出されるメカニズムを、学習者に具体的に提示することができるであろう。

⑶文化に基づく言語行動を観察する

マンガには日本社会の文化的前提を反映した言語行動の例も多く見られる。例３は、家庭裁判所に新しく着任した所長が、①前任者の所長、②最も年配の調査官、③その他の調査官と部下の判事たちに対して、それぞれ挨拶をしている場面である（注 11)。いずれの場合にも自分の無力を強調して助力を求める主旨の発言をしており、「謙虚さ」が重視される日本文化の特徴がよく表れた場面である。

図３



例３

① 所長「あ、どうも。私、兼松さんの後任として本日、緑山家裁の所長に着任しました・・浜口です。ご挨拶だけでもと思いまして。・・・はい、なかなか落ち着いたいい職場ですね。ええ、高裁の右陪席からの異動ですから、所長の仕事は何一つ知らないんですよ。いろいろお教え願います。」

② 所長「なんと言っても、裁判官と調査官のチームワークがあるからこそ、膨大な事件処理が可能なわけですね」

調査官（宮下）「はい」

所長「宮下さんには、ますますお力をお借りしないとね」

調査官（宮下）「こちらこそ！微力ながら、迅速な事件処理ができるよう力を尽くしたいと・・・ええ」

③ 所長「皆さんご存知のように、私は所長としてはルーキーであります。ま、みてくれはルーキーとは言えませんがね。しばらくは皆さんのあとについていくだけで精一杯だろうと思いますが、どうかよろしく！」

例３の①が電話なのは当然としても、②は一人だけを自室に呼び、所長の机から離れてテーブルで対面している。③も所長室であるが、前の場合と違い立場の差がはっきり現れる位置関係である。所長が宮下という調査官に対して最も配慮しているのが画像だけでもわかるが、宮下に対しては調査官の重要性を確認する発言をして彼を持ち上げ、言語形式の上でも「お力」「お借りする」などへりくだった表現を用いている。③では、冗談を言うという目上の者の余裕を感じさせるストラテジーを用いているが、ここでも自分が未経験であることを述べて相手を立てている。このように、目上の者が目下の者に「教えを請う」旨の発言をしたり謙譲語を用いたりなど謙虚な態度を示すのは、学習者の多くにとって奇異に感じられることであり（注 12)、文化的差異についての解説が必要なところである。なぜ裁判官より調査官に気を使うのか、「謙虚さ」がどれほど重視されるのかを説明しなければ、学習者はこの所長を「自信のない人」「卑屈な人」などと評価してしまうだろう。

マンガはこのように、文化的価値観に基づいた言語行動を観察するのにも非常に便利な材料を提供してくれる。

⑷建前と本音を観察する。

マンガでは複数の談話が視覚的に重層的に示されることがしばしばあり、一人の人間の中に存する異なる立場や複雑な感情を観察することができる。

例４は、年上の部下という扱いにくい相手に対して、文句はあるが対立は避けたいという複雑な気持が表れている場面である（注 13)。相手がもっと急を要する作業に注意をむけずに細かい言葉遣いについて改変を求めてきたのに対し、右上の枠をつけずに書かれた本音では「そーゆー細かいチェックはあとでまとめてやるんだけどな」と思いながらも、実際には「わかりました。気をつけます。じゃ、図式のほう、早く・・・」と応じている。

図４

このように、台詞と同時に内面の感情が文字で書き込まれるのはマンガ作品にはよくある手法であり、建前と本音の乖離を観察するには、文字で読めるだけにドラマよりもむしろ都合がいい。例４からは、他からの苦情を手短に終わらせたいときには「これから気をつけます」と言ってしまうのが一番早いという日本人の行動パターンも知ることができる。

３．教材化する上での課題

マンガを日本語教育の教材として利用するためには、いくつかの大きな課題がある。第一の課題は、すぐれた作品を選ぶことである。

既に述べたように、教材として用いる作品は、学習者が読後に議論を行おうという気になるだけの深みのある主題を持つものでなければならない。そのような作品を選べば、それだけで学習者から積極的な発信活動を引き出すことができる。幸いなことに、現代社会のいろいろな側面を独特の手法で捉えた優れた作品は数多くある。筆者が行ったコースの中で取り上げた作品に含まれる主題の一部をあげると、「変容する家族関係」「教育観」「職業観」「日本型ヒーロー」「世代間の葛藤」「働く女性の悩み」「超自然現象に仮託される日本人の願いと恐れ」などであるが、予想以上に積極的な反応を得ることができた。

主題だけでなく、表現技法と作品としての完成度も重要な要素である。小説や説明文をただ絵入り物語にしたような、ことさらマンガで読む必要もないような作品は、学習者の興味も引きにくいし面白い課題も作りにくい。現実の風景と心象風景を無理なく共存させたり、実写ドラマでは行えない簡略化と象徴化ができるという、マンガ独特の可能性を最大限にいかした作品を用いることが重要である。

さらに、教材として用いる以上作品の状況は現代的且つ現実的であることが望ましい。マンガの主人公は読者の夢や憧れを満たすために多少は理想化されており、現実には考えられないような偶然の幸運に恵まれたりするのだが、そうではあっても、局所的な言葉の使い方は現実的であることが条件である。例えば、上司にも「あんたのせいだよ」と言ってのけるOLなど、あり得ない特権を与えられている主人公が登場する作品は、まだ知識が不足していてその表現が正当に使われ得るものなのかどうか判断することが難しい学習者には、教材として提供すべきではない。虚構的な作品を用いるならば虚構性が明瞭であるものの方がかえって問題が少ないだろう。

第二の課題は、言語研究と作品の分析である。マンガを日本語教材として用いる以上、

日本語の談話の特徴を学習者に明瞭に提示することに役立たなければならない。学習者にとって有用な、典型性の高い部分を選んで合理的に提示していくためには、日本語の談話についての基礎研究の蓄積をもとに作品言語の綿密な分析を行わなければならないことは、改めて指摘するまでもないだろう。

また、作品論や表現技法についての論考を提供しマンガの芸術的価値に気づかせることも重要である。対象に対して肯定的評価を持っていれば学習効果が高まるからである。マンガが優れた表現形式であることは日本では既に常識となりつつあるが、残念ながら世界の大半の地域ではそうではない。スーザン・ソンタグの 1995 年に来日したときの発言を、四方田犬彦（注 14）が引用している。

> 「私が言おうとしているのは、大人や知識人、特にこの国では社会学的に言って知識人と分類される人々の多くがマンガや低俗大衆雑誌を読んでいるという社会現象のことです。人々は阻害されたくないと思っているのではないか、特に知識人の側に大衆文化から完全に切り離されたくないという大変なプレッシャーというか、そういう感情があるのではないかという気がします。請合ってもいいですが、西欧や北アメリカでは私たちのような大人はマンガを読みませんし、大衆雑誌も買いませんし、TV も見ませんし、公衆の面前に出なければならないとは思いません。アパートは本で溢れています。なぜ活字文化が崩壊したのでしょうか」

若い世代が日本のアニメ、マンガに大変な興味を抱いているのは確かであるが、上に引用したような否定的先入観を持っている学習者もまだ少なくはない。筆者がマンガ購読コースを提供し始めて 4 年、今では熱心な受講者がたくさん来てくれるが、初めてコースを開いた 2000 年の学期には、教材がマンガだとわかったとたんに一度も授業を受けずに登録を取りやめた者が 2 名あった。マンガという豊穣な素材を生かしていくためには、マンガという表現分野についての様々な角度からの研究が蓄積されることが是非とも必要である。

第三の課題は、作業課題の作成である。言語知識を増やすためには、語や文の意味や用法、談話の解釈などに関する一般的な課題のほかに、言葉の実態観察と分析の作業を課すことができる。例えば、特定の機能を持つ発話を拾い出して比較する、同一人物の状況による言葉遣いの変異を観察する、原則と基本例を与えて類例を探すなどである。こうした作業は、教師からの一方的説明よりも、意識化を促すのに効果がある。言語運用を促すには、作品の感想や自分の文化との比較などの伝統的な課題に加えて、登場人物の誰かについて好き嫌いを述べる、自分だったらどうするか述べるなど、比較的気楽に印象を述べる活動も、学習者の活発な参加を促す。また、述べられていない登場人物の内心を表現する、絵と台詞によって描かれた事態の展開を散文で述べるなど、多少量のある内容指定作文を課すことができるのも、便利な点である。内容指定作文は自己開示の必要がなく表現に集中できる上、フィードバックがやりやすいという点からも、クラス活動を前提とした場合には有用性が高い。学習効果をあげるためには、マンガ作品をただ漫然と読むだけでは不十分で、学習目標を明瞭に意識させる具体的な作業課題を素材作品と共に提供しなければならない。

5．終わりに

日本語教育へのマンガ作品の利用はまだ細々と始まったばかりであるが、非常に大きな

可能性を秘めている。教材としてマンガに接し、マンガを読むことを楽しむ人々が増えれば、日本の情報発信を受け止めてくれる人が増えることにつながるだろう。しかし、日本語教育の専門家の努力だけでは日本語教育へのマンガ利用を成功させることは難しい。広範な分野の人々がこの優れた表現形式と豊穣な作品群についての研究を行い、その成果に裏打ちされることが是非とも必要なのである。

注

1 山本一枝（1995)、深澤のぞみ（1997)、因・アプドゥハン・池田（2000）など。

2 van Lier(1996)は、これを「参加可能性　participatability 」と呼んでいる。「言語発達のためには、その言語への接触があるだけでは不十分であり、接触の質が問題である。その質を一言でまとめれば、参加可能性であると言えようか」(pp. 47-48, 訳は筆者)

3 「目が点になる」「目に星が入っている」「後ろに花を背負っている」など。

4　例えば次のような記述がある。「一般に敬語は大変難しいと考えられているが、これはかなりの程度誤解である。日本の敬語は言語的にはそれほど難しいものではない。例えば書クをオ書キニナル、あるいはオ書キスルというように敬語形式にすることは機械的にできるので何も難しいことではない。」『日本語要説』p. 229 。

5 松村・因（2000）pp. 25-43。

6 森本梢子『研修医なな子』1 (1997) p. 129。 You 漫画文庫、集英社

7 松村・因（2000）pp. 38-39。

8 因（2002 b)、李奈娟・松村瑞子（2003)

9 李・松村（2003)、松村・因・金（2004 口頭発表)

10 森本梢子『研修医なな子』4 (2000) pp. 116-119。 You 漫画文庫、集英社

11 毛利甚八・魚戸おさむ『家栽の人』2 (2003) pp. 95-100。 小学館文庫、小学館。

12 李・松村（2003)、因（2004)。

13 『9 時から 5 時まで』1 (1997), p. 230。 Young You 特別企画文庫、集英社

14 四方田犬彦（2000)『けだものと私』p. 89、淡交社

参考文献

李奈娟・松村瑞子（2003)「日本語と韓国語における敬意表現」『韓日言語文化研究』4、pp. 55-72

日下翠（1999)『漫画学のススメ』白帝社

日下翠（2002)『漫画学入門』中国書店

工藤浩他（1993)『日本語要説』ひつじ書房

ショット、フレデリック L.（1998)『ニッポンマンガ論』マール社

因京子(2001)「マンガを用いた日本語教育の視点と方法」『韓日言語文化研究 2, pp. 131-150

因京子・日下みどり・松村瑞子（2001)『平成 11 年度—13 年度科学研究費補助金（萌芽的研究）研究成果報告書：女性・少女マンガを素材とする異文化理解教育の方法開発』

因京子（2002a)「研究留学生を対象とする社会生活技能教育教材—専門日本語と並ぶもう一つの課題」『韓日言語文化研究』3、pp. 63-72

因京子（2002b）『留学生のためのちょっと気の張る手紙の書き方』ビーエフエスアール
因京子（2003）「マンガに見るジェンダー表現の機能」『日本語とジェンダー』３、日本語ジェンダー学会、pp. 17-36
因京子（2004a）「ジェンダー表現の機能」『言葉のからくり』英宝社、pp. 773-785
因京子（2004b）『マンガで読む日本社会：働く女性たち』九州大学留学生センター
因京子（2004c）「マンガ読解に見る韓国人話者の日本語理解」『韓日言語文化研究』５、（印刷中）
因京子・金瑞賢（2004）「韓国人学習者の敬意表現についての認識」『韓日言語文化研究』５、（印刷中）
深澤のぞみ（1997）理工系留学生を対象にした『読む本番』を意識した読解教材開発について」『日本語教育』92、pp. 25-33
藤原正憲・籾山洋介編（1997）『上級日本語教育の方法』凡人社
松村瑞子・因京子（2000）『平成10年度―12年度科学研究費補助金(c)(2)研究成果報告書：日本語の談話におけるスタイル交替の実態とその効果についての分析』
松村瑞子・因京子・金秀昌（2004）Japanese and Korean politeness: A discourse-based contrastive analysis. A presentation at the International Conference of Language, Politeness and Gender: the pragmatic roots, at the University of Helsinki, Finland
山本一枝（1995）「科学技術者のための専門文献読解指導」『日本語教育』86、pp. 190-203。
Makino, S. & M. Tsutsui (1986) *A Dictionary of Basic Japanese Grammar,* The Japan Times.
Van Lier, L. (1996) *Interaction in the Language Curriculum,* Longman.